

銀の馬車道調査報告

岩田 聖也

1. 事前調査

「銀の馬車道」とは、現兵庫県朝来市の生野銀山から同姫路市の飾磨港までの全長約49kmをつなぐ、銀の輸送路を指す。『生野銀山』によると、明治6年(1874)に着工し、2年後の明治8年(1876)にはほぼ完成したとされている。建設当時の工事の様子を記した『生野銀山行業ノ景況』によると、道路は水田より60cmほど高くされ、粗石、小石、豆砂利の順に敷き詰めるヨーロッパ舗装技術「マカダム式」が道全域に取り入れられた。また、道幅は3間から5、6間(5.4～10.8m)、両側に山麓や川岸の氾濫のありそうな部分では3、4丈(5～7m)の石垣が積み、平地では田畑から2尺(60cm)あまり高くし、道路面の中央部には若干膨らみを持たせて水はけをよくしたとある。

しかし、完成から約20年後に播但鉄道が開通、馬車は馬の負担が大きかったこともあって、馬車道は徐々にその役割を終え、大正9年(1920)に廃止されてしまう。その後は経路の変更やアスファルト舗装への改修がされ、国道312号などとして大部分が現在も利用されている。

今回の調査の目的は、銀の馬車道の痕跡を探すことである。具体的には、『生野銀山行業ノ景況』の記述にあるような道幅や石垣の確認・馬車道の現状と、国道など大きな道との経路の差異・旧但馬街道との関わりを探ることである。

2. 現地調査

平成28年(2016)8月22日、「兵庫県神崎郡神河町猪篠地区周辺の銀の馬車道」に関する現況調査をおこなった。図1の上部で国道と分岐し、左下へと流れていく細い道路の途中からが馬車道の推定ラインにほぼ一致する。調査範囲は図1のとおりである。

重視したのは、痕跡を探して、正確なラインを復元する基礎的情報を得ることであり、明治21年発行の生野地形図を参照しつつ実際のルートや道幅、石垣の高さなどについての計測をおこなった。

(1) ヨーデルの森付近

ヨーデルの森の駐車場付近から、この道路を北上していくと、東の方向へわずかではあるがカーブを描いており、図2の馬車道的位置と一致することが確認できた。歩いていくと左手に、雑草に覆われてはいるが斜面の下部に石垣をが認められる。この石垣は、加工されていない大小さまざまな石が、縦横をそろえられることなく無秩序に積まれた野面積みであった。周りの様子からみても相当な年月が経っていると想定され、馬車道の石垣である可能性がある。石垣の高さは、高いところで1.28mである(写真1)。右手も斜面



図1 銀の馬車道調査範囲

になってはいたが、石垣は全く残っていなかった。

さらに北に進んでいくと小さな橋があり、橋脚付近は石垣となっていた。その橋の部分では、道幅が周囲よりも広く、5.8mであった(写真2)。『生野銀山行業ノ景況』の記述と一致していると判断できる。周辺の状況から鑑みると、この橋の部分の道幅が本来の道幅であり、それ以外は斜面の斜度を緩める造成をした際、道幅が削られたのではないかと考えられる。造成時に橋部分のみが残された結果、本来の道幅が残されたのだろう。橋の下部の石垣は先ほどの石よりも強固で、加工されているような大きい石が6~7段ほど積み上げられていて、上部はセメントで固められていた。上部はコンクリート舗装時に固められたものだが、石自体は馬車道造営時のものと思われる。

次に北西部にあるS字状のクランク部分(図2)を確認するため、国道312号に出て、朝来市との境界付近を調査した。国道312号沿いの東側に飲食店があるが、その裏にクランクの痕跡が確認された(写真3)。図3のクランクの東半分にあたると思われる。西半分は国道によって消失している。道の東側には高さ1.03mの石垣が確認された。野面積みである。

(2) 追上付近

次に車で国道312号を南下し、追上集落を通過する但馬街道を南側から北上し、大歳神社まで向かった(図3)。追上是、但馬・丹波・播磨を結ぶ街道の岐路の宿場として発展した場所であり、集落内にはそのことを示す看板が設置されていた(写真4)。道が二股に分かれる地点では「右 ひめ志 左 たんば」と記された石造の道標を確認でき、古くからの交通の要衝であったことがうかがえる。道沿いの民家は石垣が組まれたりコンクリート塀が建てられたりしているところが多く、道路に向かって玄関を構える家が多かった。また、小さな祠があり、その中に多くの地蔵が置かれていた。この区間は銀の馬車道としては利用されていない場所であるが、写真4にある略図からも分かるように、この区間には急カーブやクランクがある。そのため、できるだけ直線にしたい馬車道では使わ



写真1 馬車道の石垣



写真2 橋と石垣



写真3 クランクの痕跡

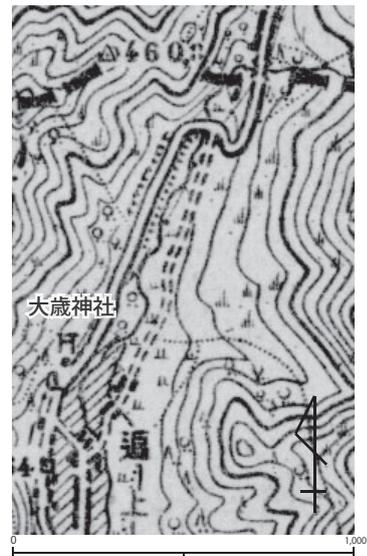


図2 明治期地図にみる周辺地域の様相



図3 但馬街道と馬車道

れなかったのではないかと推測される。しかし馬車道として利用されなかったため、旧街道沿いの古い町並みが保存されているともいえよう（写真5）。

集落の北端付近で道が分岐するが、西側の大歳神社に向かう道に進む。大歳神社の眼前から播但連絡道路沿いへと伸びる道が馬車道のルートと推定されているからであり、ここで銀の馬車道推定路に復帰する。

大歳神社は、現代の地図である図1はもちろん、明治期の地図（図2）でも確認できる。大歳神社からおおよそ50m南下したあたりの地点では、道の両サイドが水田となっている。道幅は5.6mで、道の両側に石垣が確認できた。写真6は道の東側面の石垣である。道を田畑より高くし、両側をしっかりと石垣で支えている状況は、『生野銀山行業ノ景況』の記述と一致している。上部は補強のためにセメントが入られているものの、石垣自体は相当の年数が経っていると思われた。組み方は、東側は急斜面のため石が落ちているところも多くよくわからなかったが、西側は野面積みであった。

その後、播但連絡道路沿いの道をさらに南下した。道幅は全体を通して6m前後であり、おおよそ当時の道幅のままであると考えられる。また、道沿いに石垣を多数確認することができた。しかし、その様相は道の両側で大きく異なる。播但連絡道路沿い、つまり道の西側は高速道路の補強のためのコンクリート壁になっているところが多く、石垣とコンクリート壁が交互に入り混じるような状況であった（写真7）。写真のようにこの辺りの馬車道の石垣は大小さまざまな石が隙間なく積まれており、高さもある。この斜面は播但道路建設以前非常に急であったため、石垣は土留めの役割を果たしていたと推測される。これも事前調査の記述と一致する。また、写真7のような組み方のほかに、切り込みハギ（石を四角く加工し隙間なく敷き詰める手法）のものもあった。これは馬車道の積み方とは違うため、播但連絡道路の擁壁工事の前に馬車道の石垣が崩落していた部分を補修したのではないかと考えられる。

道路の東側にも石垣を断続的に確認することができた。しかし急斜面であり崩落してい



写真4 追上地区の看板



写真5 追上の町並み

る場所も多く、また雑草などに隠れている部分がほとんどであり、積み方などをはっきりと確認することはできなかった。ただ東側の石垣は、馬車道の石垣が踏襲されている可能性を指摘できる。

調査結果・考察

石垣は場所によって残り具合が異なっていたが、積み方は基本的には野面積みのものが多かった。野面積みのような自然石を使うものが多いのは、非常に距離の長い工事であったため、少しでも建設費用を削減する目的があったのではないかと考えられる。石垣の役割としては、大歳神社南側の道路沿いにあったような周辺よりも道が高くなっている部分で両サイドを支えるための石垣と、ヨーデルの森付近や大歳神社以南の播但連絡道路沿いの道にあったような傾斜地で土留め的になされる石垣があった。播但連絡道路沿いでは、間詰石を使い隙間なく頑丈なものにしていた。

道幅については、ヨーデルの森付近のように削られているところがある一方で、5～6mのところが多かった。これは『生野銀山行業ノ景況』にみえる道幅の記述に一致する。アスファルト舗装の際に調整はされているが、おおよそ当時の道幅に近いまま残されている箇所が多いのではないかと推定できる。おわりに

銀の馬車道は明治時代、銀の輸送路として用いられてきた。調査した部分では上述したクランクの消失のように、大きな道路を通すためなどで失われた部分もあるが、現在でも確認できるルートが多く、石垣・道幅といった馬車道につながる痕跡も残っていた。

今後、課題となってくるのは馬車道と周りのつながりである。神河町役場の方のお話によると、生野銀山から飾磨港へと銀を運んだ復路では、生活用品などを生野へ運んでいたということであった。今回の調査地区では馬車を休ませたり、人が宿泊したりするような施設の痕跡など、馬車道と周りの町とのつながりが見えず、追上集落のような但馬街道の宿場町においても、馬車道周辺は発展していたようには思えなかった。そのため現段階では、付近の住民が馬車道を積極的に利用していたのかは不明と言わざるを得ない。他の地

区の事例などを含め、馬車道の設置が周りの町や地域住民にどのように影響を与えていたのかは今後の課題にしたい。

【参考文献・サイト】

- 朝倉盛明 『生野銀山行業ノ景況』 白亜書房 1981年
- 清原幹雄 『生野銀山と銀の馬車道』 神戸新聞総合出版センター 2011年
- 杉浦健夫編 『生野銀山』 生野町中央公民館 1992年
- 服部英雄、磯村幸男編 『近畿地方の歴史の道9』 海路書院 2006年
- 龍居庭園研究所編 『石積作法』 株式会社建築資料研究所 2003年
- 図1・4 2万5,000分1地形図『生野』(国土地理院 昭和47年測量、平成13年再測量、平成15年発行)
- 図2・3 スタンフォード大学ウェブサイト <https://purl.stanford.edu/tz282tc3591> (2016年11月20日最終確認)、および5万分1地形図『生野』(陸軍陸地測量部 明治21年発行)



写真6 馬車道の石垣(大歳神社付近)



写真7 播但道路沿いの石垣